

みえ 県議会新聞

令和3年度(2021年度)NO.2

みえ県議会新聞は、年に2回発行しています。
NO. 2では、令和3年度の議会の取り組みについて、次のとおり各紙面でお伝えします。

1 ページ



みえ現場de県議会を開催

2 ページ



特定課題等に対する取り組み

3 ページ



議員任期4年間を通じた議会活動の評価および改善の取り組み

4 ページ



みえ県議会出前講座を実施しています ほか

みえ現場de県議会を開催

テーマ 「コロナ禍からの復興に向けて」

新型コロナウイルスにより多くの業種がさまざまな影響を受け、地域経済は大変厳しい状況にある中、私たちは今後、警戒を緩めることなく、暮らしと経済を復興していくことが求められています。

そこで、令和3年度の「みえ現場de県議会」は、「コロナ禍からの復興に向けて」をテーマに、新型コロナウイルスにより売上げが減少するなどの影響を受ける中、ウイズコロナに対応したビジネスモデルの構築や販路開拓など、復興に向けて知恵と工夫を凝らし、懸命に努力されている桑名市内の事業者の方々や首都圏で生活する三重県出身の学生・社会人の方々（オンライン参加）と意見交換を行いました。

なお、新型コロナウイルス感染拡大の状況を踏まえ、傍聴の方々にはオンラインでご視聴いただきました。

三重県議会では、県民の皆さんの多様な意見を県議会での議論に反映していくため、テーマを設定し、県民の皆さんから直接意見を聞く「みえ現場de県議会」を平成22年度から開催しています。令和3年度は、「コロナ禍からの復興に向けて」をテーマに、桑名市で開催しました。

- 日時** 令和4年2月7日(月) 13:30～16:00
場所 くわなメディアライヴ 多目的ホール(桑名市中央町三丁目79)
主催 三重県議会 広聴広報会議
参加者 ○桑名市内の製造業、飲食サービス業、小売業の事業者の方 4人
 ○首都圏で生活する三重県出身の学生、社会人の方 2人(オンライン参加)
 ○三重県議会議員 13人 (議長、広聴広報会議議長(副議長)、広聴広報会議委員、総務地域連携デジタル社会推進常任委員長、戦略企画雇用経済常任委員長)



株式会社 水谷精機工作所
代表取締役社長 水谷 康朗さん

三重県独自のコロナ対策の補助金も使わせていただいた。補助金には、いつまでやらなければならないという締め切りがある。自分にプレッシャーをかけ、製品を実用化させることができたので非常にありがたかった。

高性能のカメラを取り付けたメガネで手元の機械や品物を精密に映し、遠隔地にいる顧客や仕事仲間がその映像を見ながらライブ通話をすることができるリモートマスターの開発など、大企業がやらないニッチなことをできるのは中小企業ならではであり、オーナー企業だからできることだと思っている。中小企業としてやるべきことを続けていきたい。

全盛期に200社以上あった鋳物屋さんは今20社を切っている。コロナで企業の設備投資も減り、注文が少なくなっている。さらに鉄材の値が上がり、これまで頼っていた外国人実習生もコロナで入国できないという厳しい状況である。そのような中、緊急事態宣言でゴムに行けませんが、当社で製造しているケトルペルは自宅トレーニングができるということで、売上げがコロナ前の10倍になった。今も高水準で推移しており、助けられている。

いろんなものを作ってきた鋳物屋さん、そういう一番厳しいところが、コロナで特に表面化している。設備を統合して一緒にやらないと効率が悪い。例えば、桑名鋳物の名のもとに連携してやるとか、横のつながりがないと10年先はゼロになってしまう。



有限会社 伊藤鋳造工所
代表取締役社長 伊藤 允一さん



会場のスクリーンには、東京から参加していただいた星合佑亮さん、松本拓也さんの映像、そして、桑名会場の映像を投影し、傍聴者の方々は、同じ映像をZoomでご視聴いただきました。

コロナ禍で若者の孤立が顕在化しているのは、特に大学1年生、2年生だと思う。三重県から単身で東京に出てきて不安な中、大学の授業はオンラインで友だちもできないという声をよく聞く。

「みえフェス」では、三重県出身で首都圏在住の若者の交流会をこれまで20回ほど開催してきたが、コロナで対面で集まらなくなった。東京ではオンラインイベントは乱立している。あえて選んで参加してもらおうという、オンラインイベントを主催する難しさ、特に大学1年生、2年生の新しいメンバーにSNSで訴求する難しさを感じている。東京に進学や就職する前の段階で、行政が「三重テラス」や「みえフェス」の存在を周知してもらえるとありがたい。

東京大学 経済学部4年生
星合 佑亮さん(伊勢市出身)



株式会社 VALCREATION 勤務
松本 拓也さん(松阪市出身)

ベンチャー企業で、セミナーや勉強会などの教育事業を定期的に行ってきたが、コロナで全く開催できなくなった。そこで、Zoomを活用した勉強会にシフトチェンジし、これまで週に1回ほど東京で行っていた勉強会を、今では多くて週に3回、日本全国、海外ともつながり、学びの場を作ることに成功している。コロナが、良い意味でも悪い意味でも大きな変化をもたらすきっかけとなった。

大学生の頃から、東京にいても三重県とつながっていたい、東京にいるからこそ三重県のためにできることをやっていきたいと思っていた。そんな中、「三重テラス」やそこで行われているイベントの存在を知り、参加するようになった。そして、「みえフェス」の存在を知り、最初は参加者だったが、いつしか運営する側になった。

「三重テラス」は非常にありがたい存在。東京にいなから三重県とつながってられる。しかし、その存在を知らない人も多い。「何か困ったときには三重テラスに行く」みたいな活用がされるとよいのではないかなと思う。



株式会社 船津屋
取締役会長 林 孝彦さん

コロナ禍でも誰一人取り残さず雇用を守ると最初に決めた。休業支援金などを使い、社員には働き方を抑えてもらい、あらゆる策をとって雇用を維持している。多くの飲食店が、利子をこの時期まで待ってあげますという実質無利子の融資を金融機関から借りていると思うが、すでに2年ほど経ち、そろそろ利子を支払わなければいけないところが出てくる。そのときまだコロナだと、はたして返せるのか。飲食店が無くなってしまうのか心配である。

ブライダル事業も非常に厳しい。延期してもコロナが収束しておらず、やむを得ずキャンセルされるお客さまも多い。こちらとしては感染防止対策を徹底したうえで、「少人数でやりませんか」とか「写真撮りだけやって、コロナが明けたらまたお友達を呼んでやりませんか」などの提案をしている。最近10名、20名規模の結婚式が増えてきた。



いきものクッキー専門店 kurimaro collection
株式会社 クリマロ 代表取締役社長 栗田 こずえさん

売上げの8割がイベントでの販売だったが、コロナですべてストップした。これからどうしていこうかと考え、今までの時間で何ができるか、コロナ明けに向けてどんな準備しておくべきか、考え方をそこに切り替え、お店も移転した。

今は委託販売を伸ばしているが、「生き物の魅力を伝える」というお店のコンセプトに共鳴していただける企業さまとタッグを組みたいと思っている。一方で、コロナだからと委託販売や卸販売を集中的に増やすと、今、コロナ禍にある水族館や動物園などの観光業がコロナ明けに跳ね上がったとき、こちらの製造が耐えられなくなってしまう。その辺のバランスも考え、体制を整えておくなどしっかり土台固めしておくことが最優先だと考えている。

※意見交換の中から、主な意見を掲載しています。なお、当日の概要は、三重県議会ホームページでご覧いただけます。

皆さんからいただいたご意見は、関係常任委員会で共有し議論するなど、県政への反映につながるよう取り組んでいきます。



みえ現場de県議会